

Ⅵ 湿原植生の分布と、植生による地下水あるいは地表水の流向

1. 箱根仙石原湿原植生の特性

箱根仙石原湿原には、神奈川県下では他にみられない中間湿原植生が発達している。また、単に中間湿原植生（p. 88）が存在するのみでなく、低層湿原植生（p. 74）とモザイク状に配分され、さらに乾生草原のススキ草原がその間に分布し仙石原独特の景観を形成している。

一般に低層湿原植生は日本中に広く河川や低湿地に散在し残されているところが多い。

とくに東北地方や北海道では広い面積でヨシ湿原、マコモ湿原、ガマ湿原、大形スゲ湿原などが残されている。中間湿原植生は、最近では開発などにより少なくなってきており、各県や地方で数ヶ所残されているにすぎなくなっている。ススキ草原を主とする乾性草原は、草地、採草地、牧場地などに利用されやすく各地でまだ点在してみられる。これらの草原植生が組み合わされた仙石原は独特な景観を形成していると言って過言ではない。

2. 箱根仙石原湿原植生の分布

湿原植生の分布は、Karte Ⅱ に示された各植物群落の配分をみると容易に理解される。すなわち青色系で示された低層湿原植生、紫色系で示された中間湿原植生、黄色、オレンジ系で示された乾生草原植生がわずかな立地条件の差に対応してモザイク状に配分している。各草原植生の住み分け、隣接植生との空間的なかわりあいが植生図から読みとれる。

3. 植生による地下水あるいは地表水の流向に対する考察

低層湿原植生を構成するカサスゲ群集、ヨシ純群落、チゴザサーアゼスゲ群集は地下水位が特に高く、地表水として流れ出ている立地が多い。したがって、これらの植物群落をなぞることにより地下水、地表水の流向が理解される。半面、乾生草原のススキ群集は、人為的影響の度合を強く示し、地下水の影響は、その構成種に中間湿原植生の構成種が何%侵入したか、あるいは低層湿原構成種と、何種共存しているか、さらに、優占する種により地下水位の高さが理解される。植生図上ではとくにヨシが侵入しているかないかを各群落に対し細くわけて凡例を設けているが、ヨシの侵入は、水分条件の移動とも関連され、乾生草原では比較的指標として利用される。

（藤原）